秋の夕暮れ

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋の夕暮れ

【Ｎコード】
Ｎ２０８８Ｚ

【作者名】
Ｋ＝Ｓａｙｕｔｏ

【あらすじ】
ある秋の日、日本の人口は男子が１人減って、女子が１人増えたと思う。
高校で野球部に入っていた水木　秋次はある日起きると女の体になっていた？
よくある異世界物でもなくよくある転生物でもなく、よくあるなっちゃったパターン。神はむかんけー。

――――――――――――――――――――
更新速度は出来る限りどんどん更新していきます。

まえがき

俺は水木　秋次、只今人生最大のいや、人類最大の危機に立っております。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

昨日は部活の練習の後に普通に親友で幼馴染の静流と一緒に帰って、家についたら風呂入って、リ〇カーン見ながら飯食って、予習なんてめんどくせーと睡眠に入ったわけだ。

で、それがどうやったら今の状況につながるのかと考えている。繋がるどころか接点すらちげぇ。そもそも次元がちげぇよ。

で、今更だけど今の状況はというと朝起きて寝癖があるか確認しようと鏡を見たらそこに写っていたのはとんでもないほどの美少女なわけで。勿論オレッ娘って訳じゃない、いや他人から見たらそれ以外に何にも見えないか。

言い換えよう、俺は男だ。少なくとも昨日まではそうだったはずなんだよ。

第一話　俺が女に！？（前書き）

水木（みずき）　秋次（しゅうじ）

ある日起きると女の体になっていた主人公。女体化後はストレートな長髪で黒髪、目はパッチリとしていて小顔で肌は白く、胸が小さいこと以外スタイル抜群で身長が低い美少女

水木（水木）　和枝（かずえ）

秋次の母親でスタイルは良くとしの割に結構若く見られている。

田村（たむら）　静流（しずる）

秋次の親友で家族よりも信頼できる存在。秋次に女になってしまった事を家族よりも先に打ち明けられた。

第一話　俺が女に！？

「なんだよこりゃ」

鏡を見て放心する。少し経って俺はある物を確認しようと思った。そう、男の財宝である伝説の如意棒と黄金の宝玉を。ズボンの中に手を入れるとそこには何もなく妙にスカスカしていた。

そのうちそういやぁさっきの声も妙に高かった様な・・・・。

「あー、あー」

と高い声が出る。やべぇ、この顔とか声とかまじかわええ。俺はあえて視界のしたの方の本来胸板がある位置にある小さな膨らみは無視しておく事にした。だって触ってみて感じちゃったりとかしたらヤバそうだったから。

あーどうしようかなこれから。などと考えていると、秋次起きなさーいとオカンの声がしたので俺は

「今準備ちゅー」

と危うく言ってしまいそうになり慌てて口を閉じたが危機は去らなかった。何も返事がない事を不審に思ったのかオカンが階段を登って来ている。

ヤバイ、どうしよう。そうだっ、鍵をかけよう。

ガチャ

と鍵がかかる音がして安心する。

「秋次ー、なんで鍵なんて閉めてるのー？開けなさーい」

とオカンがドアをノックしていう。俺は

「風邪引いてるから今日は休む」

と言ってしまいそうになるが止める。俺は机の上にある紙に”風邪引いたから今日は休む、喉がやべぇほど辛いからうつらないように俺を隔離する”と綺麗とは言えない自で書きそれをドアの下の隙間から通す。

「あー、風邪そんなに酷いなら病院行きなさい」

病院だって、冗談じゃないそもそも今の俺じゃ保険証とか使えねぇだろ？

俺は”行くのも辛いから”と書いて紙を送る。

「そう、それじゃ今日は母さんもお姉ちゃんもいないからちゃんとなんか食べたりしなさいよ」

とオカンが去って行ったので一息付く。って、今ので打ち明けにくくなった気がするのは俺だけだろうか？でもどうすりゃいいんだ？女の体の事なんかなーんもわかんねぇし。ま、考えてもしゃーないし寝るか。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

今日は秋次休みか、まっプリントとか持ってってやるついでにお見舞いでもしてやろーかなぁと思ってみるけどいざそうしようと思うとめんどくせぇ。

ピロロロ、

ん、メールか。っと秋次からだ。えっと内容は”今日の放課後、静流空いてるか？”だ。何も予定とか・・・ないよな、よし。俺は”大丈夫”と送ると”じゃぁ今日来てくれ”と届いた。

今日は6時間授業だったが秘技、全教科睡眠術により体感時間的には2~3時間で終わった気がした。

放課後、俺は約束通り秋次の家へ来た。インターホンを鳴らすと誰もこなかったがメールで”開いてるからはいって”と言われたので俺は玄関に入り秋次の部屋の前まで来た。

「しゅーじー、きったぞー」

と俺がそう呼びかけると下から紙が来たので読んでみると”話がある、絶対信じてくれるか？”と書いてあったので。

「なんの事だかわかんねぇけど俺は信じるぞ」

と言うとガチャと鍵の開く音がしてゆっくりと顔が覗いてくる。しかしその顔は秋次の物ではなく女の子の顔だった。

「あれ、秋次・・・・の彼女？」

秋次には彼女はいなかったと思うが・・・・、まさかこの事だったのか話って？と俺が思ったがその話はそれと全く違った物だった。

「ち、違う・・・俺が、秋次・・・だよ」

ナンダッテ？コノオンナノコガシュウジダッテ？

「あぁ、同名か。でこの家の息子の秋次は？」

俺がそういうと秋次と名乗った女の子は少し俯いてから顔を上げ。

「だから、俺がこの家の息子の秋次。お前の親友の秋次だよ」

は？何を言ってるんだこいつは、そもそも息子ってのは男だろこいつはどうみても女じゃないか。

「おいお前、冗談もいい加減にしとけ」

と俺が声のトーンを低くし少しキレ気味な喋り方で言うと。そのいかれた女の子は一瞬ビクッと身体を強張らせる。

「だ、だから、俺がしゅ」

「いい加減にしろっつってんだよ、おい秋次何処だよ悪ふざけなんかしてないで出て来いよ」

俺がさっきの喋り方のまま壁を叩いて言うと女の子はさっきよりも怯えた表情になるがすぐにもとの表情に戻し。

「好きな物は麺類、嫌いな物は柑橘類、誕生日は9月1日、A型、両親は共に自営業」

と顔すら合わせた事のない女の子が言ったのでびっくりしたがどうせ秋次が前もって言うように指示していたのだろう。

「なんでも良いから聞いてみてよ秋次なら絶対にわかるような事、全部答えて見せるよ」

女の子はさっきの表情のままそう言ったので俺は色々と聞いて見る事にした。

「秋次の初恋は？」

「明美さん」

「俺と秋次が出会ったのはいつ？」

「小学2年生のとき遠足の班決めで余ってたお前を俺が誘った時」

「俺の特徴は？」

「高所恐怖症、めんどくさがりや、物忘れが激しい、元不良、頭は悪い、さらに」

ってこいつ本当に全部当ててやがる、本当に秋次なのだろうか？・・・ってなんか俺すごい侮辱されてる気がする。

「あー、もうわかった」

「じゃぁ信じてくれんのか？」

「信じない方が無理あるって」

ここまで言われたら信じる他ない。でもなんで女の子の姿なんだ？

「実は・・・今日朝起きてみたら女になってて、ほら胸とか膨らんでるだろ」

そう言って女の子、否、秋次は俺の右手を胸の上に乗せた。俺は思いのほか胸が柔らかくて気持ちよく手をそのままにしておくと秋次の顔が真っ赤になってた。

「そろそろ、離してくれよ」

「あっ、わりぃ」

俺は慌てて手を離した。

「それで、お前の両親は知ってるんだよ・・・な？」

一瞬ピクッと反応した、それだけ十分わかった。両親はまだ知らない。何故わかったかって？だてに幼馴染やってねぇよ。

「お前ならもうわかったよな、それで、お前から俺のオカンとかに言ってくれないか？」

どーせそう来ると思ったさ、まぁ親友が困ってるのを見過ごせないし。

「わぁーったよ、その代わり今度奢れよ」

「ありがとな」

「っへ、今更感謝すんなよ気持ち悪・・・・くもねぇな、今のお前なかなか可愛いぜ。ぜってぇーモテるぞ」

「悪ふざけはもう寄せよ。にしても、改めて思ったけど・・・・お前背たけぇな」

俺が高いんじゃなくお前が小さいんだそう思ったけどまぁ実際俺も高い方ではあるし秋次は女になって2～3回りくらい小さくなったと思う。と俺が考えていると。

「ただいまぁー」

秋次の母親が帰って来た。さぁて、ミッションスタート。

第二話　とりま、ミッションコンプリート？

「静流、頼んだぞ」

俺がそう言うと静流は任せろと言って下に降りて行く。俺もオカンに見つからないように降りる。

「おばさん、お邪魔しています」

「あら、静流君じゃない。秋次のお見舞い？」

「まぁ、そんなとこです」

「そういつもうちの子がお世話になってるわねぇ」

「いえいえ、それより今から重要なお話があります。おい、こいよ」

多分俺を呼んだのだろう。静流の横に行く。

「この子は？」

オカンが聞く。

「おばさん驚かないで聞いてください。この子は秋次です。今日朝起きたらこうなってたみたいでさっき秋次にしかわからない様な事を聞いたら全部答えたので」

「秋次？本当に秋次なの？」

「あぁ、オカン。俺だよ秋次だよ」

「まぁ、なんてこと。こんな・・・・・・可愛くなっちゃって」

へ？

直後俺はオカンに抱きしめられた。あれ？オカンの胸がめっちゃあたってるけど興奮しない、ってか親に興奮するわけないか。

「オカン、疑わないの？」

「静流君だって言ってるし、私は信じるわ、お姉ちゃんやお父さんには私から言っておくわ。これからの事は全部任せなさい」

あれ？涙が出てくる。何時の間にか俺は声をあげて泣いていた。

「お、オカン。ありがとぅ」

「あ、秋次。今日からオカンじゃなくてお母さんって呼んで頂戴。それがお礼の代わりよ」

今まで一度もお母さんなんて言ったことはないから少し恥ずかしいがこのさいしょーがない。

「わかったよ、お母さん」

「うん、秋次はひとまず部屋にいなさい。あ、静流君も秋次と一緒にいてあげてね。あ、くれぐれも間違えだけは犯さないようにね」

まってお母さんなぜ最後のほう笑ってたし。なんかこえぇよ。

「はい、できる限り間違いは犯さないように頑張ってみます」

っておい静流完全拒否しろよ。

「さぁて、上に行こうか」

静流がそう言って俺の腕をつかむ。こえぇよ、前の俺だったら簡単に振りほどけただろうけど今の俺じゃ筋力とか異常なほど落ちてるから振りほどく事も出来ない。

恐喝されるときってこんな感じなのかなぁ？

俺は静流に連れて行かれる形で自分の部屋に戻ってきた。

「それにしてもお前本当に女になったんだなぁ、力とか全然なくなってるだろ」

「え、なんでわかんだよ」

「だってお前さっき本気で俺の手を振りほどこうとしてただろ」

それは本当のことだった、本気でふりほどこうとしたがビクともしなかった。大体今まで静流にどんな事をされても恐くなかったのに（とあることにより全治2週間のけがを負わさせられた過去あり）さっきは物凄く怖く感じた。もしかしたら物理的な事以外でもなにか変わっているかもしれない.

「お前これからどうするんだ学校とか行けんのか？」

たしかにそれは大きな問題だが今はそれ以上のもんだがいある、今の俺に戸籍はない、つまりはたから見れば女になったと騒いでいる謎の痛い美少女以外の何者でもない。そう思っていると、急に扉が開きお母さんが入ってきた。

「秋次やったわ、お父さんがうまくやってくれるって。そのための精密検査とかやるから今すぐ来て欲しいって、準備しなさい」

「準備ったってどうすりゃいいんだよ」

「着替えに決まってるでしょ」

あー、着替えですかそうですか。って着替え？まてまて、俺は健全な男であり健全な男がこんな可愛い美少女を襲わないわけがない、ってよく考えたらこの美少女って俺じゃん、流石に自分で自分を襲う事は出来ねぇよ。でも待て、着替えたら見えてしまうんじゃないか？例の膨らみが。駄目だそんなものを見て平常でいられる自信がない。

「どーした秋次、顔真っ赤だぞ？」

ヤバい、いろいろと妄想してたら顔がめっちゃ熱い。てか、男のときにはこんなに熱くなんなかったぞ。

「う、うるせぇ。ってか静流はとっとと出ろ」

「そうねぇ、流石にそれはまずいわね」

とお母さんが静流を部屋の外に出しこっちを見る。

「さぁ、着替えなさい」

は？

「いや、お母さんが着せてくれるんじゃないの？俺目閉じてるから」

「何いってんのよ、これからその体で何万回も着替えることになるんだから早めに慣れときなさい。それに」

それにってなんか怖い予感が・・・・・

「こんな美少女が恥ずかしがりながら着替える姿って可愛いじゃない」

こんの、あ・く・ま。

第三話　身近な落とし穴（前書き）

水木（みずき）　柚木（ゆずき）

秋次の父親。職業は？と聞かれれば。風の吹くまま気の向くままと答え。普段は何やってるんだ？と聞かれれば。とある企業の社長と答え。今までどこ行ってたんだ？と聞かれればボランティアとかと答える。相当一般とずれている謎の多い人

第三話　身近な落とし穴

結局俺は、女物の服などを持ってるわけではないので（持っていたら変態だってｗｗｗ）ジーパンにパーカーというラフな格好にしたわけだ。しかし・・・・・、俺が普段着ている服は全部ブカブカだったので俺が小学生の時に着ていた服がぴったりだったので助かった。お母さんがとっておいてよかったと思う。

「それじゃ静流君、お留守番頼めるかしらねぇ」

「えぇ、大丈夫です。秋次、まぁがんばってこい」

こいつ顔では真剣な振りしてるが内心では面白がってるし。ほら、口を良く見てみるとひくひくしてるじゃねぇか。帰ったらいろいろといじってやる。

いきなりですが、主人公はあまりの恥ずかしさによりタヒってこの小説は終了いたしました。というのも、精密検査でいろいろと図るわけだ、検査する人が女性だったのは良かったんだ、多分・・・・・。そこで聴診器あてられたり、人間ドッグやられたり、挙句の果てにはスリーサイズを測られたときに測る人の手が俺の胸に当たって声をあげてしまった。肌の感覚がすごい敏感になってた・・・・・。現時点で確認できた変化はまず体が女になってしまった事だがそれに連動して肌の感覚が敏感になってた、まぁ後は身長とか髪とか筋力とか。精神面では、めっちゃ怖がりになってた事かな、もしかしたら涙もろくなっているかもなそれは結構つらいな。これから先こんなんでやってけるのだろうか？まぁ、検査の結果はあと数分で出るらしいのでそこで健康であることを願う限りだ。俺が座って待

ってると一人の男が目の前に現れた。

「やぁ秋次、気分はどうだ？」

俺が顔をあげてみるとそこにはよく知っている人の顔があった。

「オトン・・・・、気分は、最悪かな」

「そうだ、俺の事もお父さんって呼んでくれないか、それにほら」

オトン、いやお父さんが手を差し出しその手には何かがあった。
俺はそれを見ると改名用の紙だった。

「これは？」

「いくらなんでも女で秋次は変だろ、だからいっそ名前も変えてしまおうと母さんと話し合ったんだ」

いつの間に話し合ったんだよ、それにしても結構親って子供の事を考えているんだな。深くそう思うよ。

「それで名前の事なんだが、あまり変えるのもお前がなれるのが大変だろ。だから、お前の字からとってあきだ、漢字はそのまま秋でどうだ？」

秋か、読み方だけなら似ても似つかない名前だけどまぁそこはやっぱ慣れろってことか。漢字を間違う事はないしそれでいいな。

「それでいいよ」

「よし秋、受け取れ」

お父さんがそう言ってポケットから何かを取り出した。それは身分証明書でもうすでに水木　秋という名前が書かれていた。お父さんって本当はマジシャンだったのか？

「いやそんなに驚くな、もうすでにつくっておいたんだよ。お前がいやだって言ったら再発行しようと思ってただけだ。そうそう、検査結果だがいたって健康」

「本当か、よかったぁ」

「そう早まるな、いたって健康じゃなかった」

え？今何て？

「お前は重度の日光過敏症でな。まぁ今の時間帯はもう真っ暗だから何もなかったと思うのだが昼間は日光に当たってはいけないんだ」

「それって不可能に近くない？」

「日傘や、日焼け止めなどを使えばいいんだがそれでも日の光にあたり過ぎるといろいろと大変なことになるから気をつけろ」

それはそれは、相当つらい。俺これから生きていけるか自信無くなった。

「で、お父さんもしかして・・・・戸籍も変えられた？」

「はっはっは、心配するな。しっかりと水木　秋　性別女に変えたぞ」

どうやら戸籍とかの心配は必要なくなったようだな、いったいどんな手段を使ったのやら。

「そうだ、母さんはこれから仕事へ「キャバクラか？」

「違う、いたって健全なコンビニのパートだ。それと、静流君が家で留守番してくれてるんだって？お金あげるから彼と一緒にどっかでたべてきなさい。お釣りはこずかいにでもしなさい、父さんも今日は帰りが遅くなるからな」

そう言ってお父さんは財布から1万円を取り出す。普通に考えて5千円あれば十分なんじゃないかと思うがあまりは好きに出来るのであえて何も言わずにもらっておく。うっひゃ絶対7千円程度余るぞ（笑）。

「わかったアネキは？」

「そっちは聞いてないが多分今日も遅くなるんじゃないか？」

「ふぁーい」

そういって俺はあくびをしながらドアノブに手をかけようとするが。

「ぐぶっ」

どうやら身長が縮んでいたのでドアノブ（もともとここのは普通

のより高い位置にあった）が顎にあたった。

「大丈夫か、秋？顎が赤くなってるじゃないか。女の子になったんだから体を大切にしなさい」

「ふわぁ～い」

なんか、いろいろと考えていたけど結構日常面で相当大変かもなぁ・・・・・。戸籍とか大きなことを考え過ぎてそういう身近な事を全く考えていなかった。ＴＨＥ灯台もと暗し・・・だな。

第四話　危ない訪問者（前書き）

田村（たむら）　佳代（かよ）

静流の妹で俗に言う・・・・。いろいろと危険な人物でありどうやら秋次もとい秋の事が好きなもよう。

第四話　危ない訪問者

「かえったぞ～」

俺は家の扉を開けながら言うと奥から一人の男が歩いてきた。静流だ。

「よぉ、どうだった？」

「どうだったといわれてもなぁ、いろいろとあった」

俺がそういうと「何があった？」と聞かれた。出来れば聞いてほしくなかったような気がするような気がしない様な・・・・。

「なんかさ～、戸籍とか普通につくりかえてもらったし改名もしちゃったし。でも一番は・・・・・この体に持病があった」

「持病！？それでお前は大丈夫なのか？命にかかわるような事なのか？えっと、それで」

「落ちつけよ、お前の事じゃないだろ」

「俺の事じゃなくてもお前になんかあったら俺だって悲しいんだぞ」

急に静流は怒鳴り俺は一瞬ビクリとしてしまいすこし後ずさってしまった。

「わりぃ、急に怒鳴って。でもな、ちゃんと親友としてお前を心

配してんだからな。それで病気はどうなんだ？」

「うん、日光課金病？だっけか」

「日光過敏症の間違えか？」

「そー、それそれ」

静流はフムと考えた後。

「じゃぁ、今度必要なものでも買いに行くか？」

必要なものとな？

「何が必要なんだ？って顔してんな。要するに日にあたっちゃいけないんだから日傘とか日焼け止めとか帽子とか必要なんじゃないのか？」

「なるほー、さっすが静流だな」

と俺が言ったとこで――ピンポーン――とインターホンが鳴る。

「あ、静流待っとけ出てくるから」

と俺は行って玄関まで行き扉をあけると。

「すいませーん、うちの兄がお世話にな、っっっっっ！？」

そこには一人の女の子、静流の妹の佳代ちゃんがいた。

「どうして、先輩の家に女の人が・・・・・。まさかっ、先輩の彼女？」

「いや、ちがっ」

佳代ちゃんは目を虚ろにし四次元には通じていないポケットからたたたたったたたーんという効果音もなく一つの折りたたみ式ナイフを取り出しそれを広げ両手で持つ。

「先輩は私だけのもの、誰にもやらない」

佳代ちゃんはそれを俺に突きつけ飛びかかってくるが俺はそれを紙一重でよけるが動きの要領が違っていたので本当だったら普通によけられたはずがこけて倒れてしまった。いきなりながら大ピンチ、この小説はもう終わるのか？

「なんか、私の第六感が貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒って言ってるけど私は悪い子だから無視しちゃうね」

いや、その通りだよ。無視しないでくれ。ってマジでヤバい、死ぬ前に行っておくさっきのメタ発言すいませんしたー。

佳代ちゃんはナイフを振り上げる。終ったと俺は思ったがいつまでたっても痛みは来ない。あぁ、痛みもないまま天国へ行けたのは幸いだったな。

「やめろ佳代！」

俺はそんな声が聞こえたような気がして目をあけると佳代ちゃん

の手を押さえている静流が目に映った。

「お兄ちゃん！？まさか・・・・。そう、先輩の彼女じゃなくてお兄ちゃんの彼女だったのか。でも、お兄ちゃんも私だけのものなんだからどの道ここであなたには三途の川を渡ってもらうっ」

佳代ちゃんは静流の手を振り払い俺にナイフを振り下ろす。今度こそ終わったな、天国では俺どんな姿なんだろ。男に戻ってたらいいなぁ。と覚悟を決めるがまたもや痛みはなかった。今度こそ目を開けたら目の前に川があるんじゃないかと思う、それとも異世界に転生でもするのかな？俺はそう思い目をあけるとそこは俺がよく知っている場所、俺の家の玄関だった。

「あれ、生きてる？」

俺は顔をあげるとそこには悲しそうな顔でナイフを持っていない佳代ちゃんがいたナイフは佳代ちゃんの足元に落ちていた。

「どうして、貴女が先輩なの？」

俺は少しの間意味がわからなかった。

「どうして、女になっちゃったの？」

俺は静流が話してくれたのだと思ったがそんなすぐに信じるわけもないと思って静流のほうを見るとのびていた。多分振り払われたときに頭でも打ったのだろう。

「どうしてなの？なんで、こんなことになってるの先輩」

まさか、見破ったのか。この人は看破眼の持ち主ですか？と思っていたがさっき行っていた事を思い出す。“第六感”とか“貴女を傷つけるのは先輩を傷つけるのと一緒”と言っていた。まさか本当に第六感をもっているのか？

「本当に俺だよ、秋次だよ。でも、どうして俺だってわかったの？」

「うん、先輩の心と一緒で澄んでいて暖かくて、それに心紋が同じだったから」

「心紋？」

「心紋っていうのはね、指には指紋があるでしょ。それと同じようなものが心にもあってそれが心紋」

すごい、佳代ちゃんは人の心を読む事が出来るのか？俺はその事をすごく聞きたいと思ったがあまり他人に詮索されるのは良い気がしないと思ったので俺はやめておいた。

「ごめんなさい先輩、本気で・・・・殺そうとしてた」

「いや、もういいんだよ。それより静流は？」

俺は静流のほうを指さし聞いてみると佳代ちゃんは静流の額に手を当てるとこちらを向いて。

「大丈夫、脳内出血もしてないし軽い脳梗塞だから命に別条はないよ。起きたときにちょっとふらふらするかもしれないけど」

すごいな、第六感ではこんなこともわかるのか。

「それより、先輩大丈夫？」

「あぁ、大丈夫だよ。っと」

俺は少しフラッとして佳代ちゃんに支えられる。さっきまではいろいろあって気がつかなかったけど佳代ちゃんの目を見るときに顔を上げる必要がある。それはつまり・・・・。

「ちっちゃい先輩も可愛い」

と佳代ちゃんに抱きつかれた。佳代ちゃんももともと同学年の中では小さい方らしいが俺はそれよりも小さかった。なんか、自分はちっぽけだなと思う。

第五話　他に変わった事（前書き）

なんか、エロくするつもりはなかったんだけどこういうジャンル（女体化）の小説を書く場合って相当なテクニックがないと回避する事は無理だと思う。ちなみに俺にそんな技術はあるはずない。エロいのが苦手な人は今すぐ右回り３６０度回転して歩みを進めたほうがいい。結局はこっちに来るっていうね。

第五話　他に変わった事

俺が佳代ちゃんに抱きつかれてから数秒後、静流が起きた。

「あれ、ここはだれ？俺はどこ？」

とふざけていたが俺と佳代ちゃんは華麗にスルーした、いい加減降ろしてほしいと思ったのだがどうやら俺は佳代ちゃんよりも力がなくなったらしくなんか抵抗しても無駄で終わる気がするのであきらめる。

「あ、そうだ。晩御飯をどっかで静流も一緒に食べろって言ってたけど佳代ちゃんも来る？」

「うーん、お兄ちゃんは行きたいんでしょそうでしょ。しょうがないなぁ私がお母さんに電話しといてあげるよ。どうせ今日はマ〇ドナルドって言ってたし」

佳代ちゃんはそう言って携帯を取り出し電話をかける。

「うん、そう、だから今日は先輩とお兄ちゃんと一緒に食べてくる。うんじゃぁ・・・・・。おっけ大丈夫だったよ。よーし、早速行こう」

俺はそこでどこへ行こうか考えていなかったのだがあまり遠くへ行くのもめんどくさかったので近くのサ〇ゼリアへ行くことにした。やっぱ狙いはミラノ風ドリアとミックスグリルだな。あの肉汁はたまんねぇよ。

俺たちは家を出てサイゼリアへの道を歩みだす。

さっきのまでの威勢はどこに行ったのやら結構恐ろしい事になっていた。とりあえず入店した時までさかのぼっておく。

「私はなににしようかなぁ～、秋先輩はどうするんですか？」

「う～ん俺は・・・・・ってなんで俺が名前変えた事知っているの？」

「そりゃ、第六感ですよ第六感。ちなみに先輩がスリーサイズ測った時の恥ずかしー出来事までわかりますよ」

わー、その事を言わないでくれぇもう思い出したくない声が出てしまった、まだそれだけならセーフだと思う。でもその声がちょっとエロかったんだよどうやったら俺からあんな声が出るんだよ。

「秋次なんかあったのか？っともう秋なのか」

季節が？俺の名前が？と思ったがおそらく後者だろう。

「お兄ちゃん、女の子には男の子にはわからない事があるんだよ」

「そういうものなのか、そうか秋。お前ももう立派な女の子への仲間入りだな」

「それじゃぁ私ＧＬですね。そうだ、もう先輩は全部が女なんだ。それはつまりぼそぼそ」

そのぼそぼその所は聞こえなかった、うんきっとそうだ聞こえなったんだ。

「あーもうっ、やけ食いしてやる。ミラノ風ドリアとミックスグリル注文だぁー」

「先輩はそれですかじゃぁ私もミラノ風ドリアで」

「じゃぁ俺はリブステーキだ」

皆がそれぞれの注文が決まり、ボタンを押し店員に注文する。しばらくたち料理が運ばれてくる俺はミックスグリルにナイフを刺し込み肉を切りフォークで肉を口に入れる。食べる前までは食欲がすごくあったのだが肉を口に入れた瞬間にその気持ちは全て霧となって消えうせた。

「肉が・・・・まずい」

「えっ？どれ一口・・・・・ん、全然うめぇじゃんか」

俺はまさかと思い嫌いなはずのコーンとグリーンピースを食べてみると、案の定めちゃくちゃうまかった。

「あー、先輩味覚も変わっちゃったんですか可哀想に。今の先輩にとって肉は大嫌いなものなんですよねちなみに野菜は全部好きになってますし先輩の嫌いな甘いものなんて食べるのが止まらないくらい好きになっちゃってますよ」

「秋、それは俺が食ってやるから。そのドリアだけは食っとけ」

「あぁ、肉が食べれないなんて・・・・・」

俺は肉が食べれない事に悲壮感を感じながらドリアを食べるがドリアが3分の1ほどなくなった時に今度は満腹感に襲われた。

「静流、俺もう腹いっぱいだ」

「マジかよ、お前こないだまでこれ3つは食えただろ」

「ふぇんふぁいほふぁふぇふぇふほう「佳代、口の中の物を片づけてから話せ」

と佳代ちゃんが口の中に物をたくさんつめたまま話すがすぐに静流に制止される。

「はぁ、腹がいっぱいで苦しい。水飲もう」

俺は水を飲むがそこである事に気がついてしまった。今日、一度もトイレに行ってない。もう漏れる寸前だという事に気がつき俺はあわててトイレに駆け込むがそこでさらに危機に陥った。一瞬間違えて男子トイレに入ってしまったと思ったがここは男女関係なく洋式が1つだけある事を思い出し安心する。だが俺はトイレの仕方がわからなかった。

「ヤバい、漏れる。どうすりゃいいんだよ」

俺が深い絶望感に襲われていると。

「先輩開けて」

佳代ちゃんの声がして俺は急いで扉をあける。

「どうしよう、俺女子のトイレの仕方わかんねぇよ」

「先輩ズボンとパンツ降ろして便座に座って」

俺はすぐに言われたとおりにしてズボンを下ろしパンツをおろそうとしてあわてて目を閉じて降ろし便座に座る。すると、俺の小さい胸が佳代ちゃんにわしづかみにされる。

「あっ」

また声をあげてしまったが佳代ちゃんは気にせず手に力を入れる。そして俺は全身から力が抜けた。その時なにか水がはじける音がした多分俺の尿が出たんだろう。というかいつまでも佳代ちゃんが胸をわしづかみにし続けるせいで体がだんだん熱くなっていくような気がして俺の呼吸が乱れて行った。

「ハァハァ、か、よちゃん、そろそろ、はな、して」

「あ、先輩すみません」

ヤバかった、俺が俺でなくなるまで数秒前と言ったところだった。今のは・・・・感じてしまったというやつなんだろうか、それにしてもすごく、気持ちがよかった・・・・・。

「先輩、顔真っ赤だけど大丈夫?」

「うん、なんか今俺が俺じゃなくなるかと思った」

「ごめんなさい先輩ちょっとやりすぎちゃったかな、でもこれで先輩が感度高いってわかったからこれからこういう事何度もやっちゃうかも」

それだけは勘弁して下さいマジで。俺マジで恐怖症になるかも・・・・・。

第六話　再認識

結局、佳代ちゃんがやった事はただ単にやりたかっただけだったという。そのせいで俺は・・・・・・。

「先輩大丈夫、一度出来ればそのあとはもう出来る・・・・はず」

「なんか、やっぱいいや」

何というか最悪な1日だった。この後も何もない事を願いたいね。俺が軽くブルーになりながら席に戻ると静流が少し気にしていたようだが声はかけてこなかった。お前はホントに空気が読める友達だな。俺がそう思って席に着くと先ほどまであった食べ物は全て消えていた。

「まさか静流、お前全部食べてくれたのか？」

「ああ、ったく今度からしっかり考えてから行動しろよな。まぁ、美味かったからいいけどな」

「あぁ、ほんとに悪いな。っとそろそろ出るか」

俺がそう言って伝票を取ろうとして手を伸ばすが誰かの手が俺が取ろうとした伝票をとった。

「いいよ、俺が払うから」

それは静流だった。

「マジで、サンキュ～」

にゃっは～、これでまるまる1万円は俺のもんだぁ～。俺が内心でそうカーニバルを起こしていたが次の静流の一言で静まった。

「女の子に払わせるのもあれだしな」

「やっぱ俺が払う」

そう言って俺が伝票をかすめ取ろうとしたが、ヒョイっと俺の手の届かない高さにあげられてしまった。

「お～れ～が～は～ら～う～」

「払いたければ俺から伝票をとる事だな」

おのれぇ、こいつ人がめっちゃ小さくなったのをいいことに今まで出来なかった意地悪をするとは。畜生こいつでけぇ、俺が男のときは間違いなく俺のほうがでかかったのに。俺は出来れば使いたくなかった最終奥義を使う事にした

「くらえっ」

「なっ、何をする秋離れろぉ」

俺が使いたくなかった最終奥義、それは俺が静流に抱きついてそして静流が俺を離そうと手を下げたときに伝票をかすめ取る、最高な方法だ。ほら見ろ、もう伝票が届く位置にあるぞ。いまだぁ。

「お前は考えがわかりやすい奴だな」

またヒョイと上にあげられてしまった。

「おのれぇ、静流めぇ。あきらめて俺にそれをよこせぇ」

「いや、あきらめるのはお前だろ？」

うっ、くそ。あきらめるか。そういえばさっきから後ろから邪気がするのだが何だろう。俺がそう思って後ろを見るとそこには佳代ちゃんがヤンデレモード（？）でそこに立っていた。

「お兄ちゃんばっか、ずるいよ。私だって・・・私だって・・・・先輩をギュッとしたい」

は？

「もう我慢できなーい」

そう言って佳代ちゃんは抱きつく。なにか柔らかいものが顔を埋めて窒息するかと思った。

「はなせぇ～」

「後5分」

いや、後5分っておきるのを先送りにしてる人じゃないんだから。俺は頑張って抜け出そうとするが無理だった。

「じゃ会計すますぞぉー」

静流はそう言ってレジに行く。どうやら完璧にあきらめろという事だろう。

それから5分後に俺は離してもらい、今俺は3人で夜の道を歩いている。

「で、秋は明日学校行くのか？」

「うん・・・、なんかお父さんが学校にももう伝えてあるらしい」

「そうか、まっ頑張れや」

「他人事みたいだな」

「他人だろ？」

なっ、こいつひでぇ。大切な友達が困ってるってのに他人事だからって知らないふりかよ。

「そんな顔すんな、本当に冗談が聞かないやつだなお前は。出来る範囲内でサポートするよ。ラッキーなことに席も隣だしな」

「えっ？お前の席と俺の席は結構離れてるだろ？」

「まだ言ってなかったな。今日席替えしたんだよ」

なるほど、それでか。結構ラッキーだな。

俺たちがそんな話をしているうちにいつの間にか家についていた。

「じゃーなー」

「おう、お前一人だししっかり戸締りしろよ」

「じゃぁーねー先輩」

そして俺は一人になり家の扉を開け中に入る。今日はいろいろあって疲れてるしとっとと風呂に入って寝ちまおう。そう思い俺は風呂場に向かい。相当根性を出して服を脱いだ。

「こうして見てみると、本当に可愛いな。なんか肌も白いし腰も細い」

残念ながら貧乳だがな。って何を考えてるんだ俺は。

「さっさと風呂入っちまおう」

俺は頑張ってからだとかを洗ってから風呂に入る。俺は風呂は好きだった。気持ちよくて温かいからな。でも今回は入って数分でのぼせた。頭がぼーっとして思考回路が全く動かなく、ただ俺の生存本能が告げていた。これ以上風呂に入ってたら危険だと。俺はぼーっとしている頭で風呂から出てタオルを取ろうとする。そこで意識が途切れた。

第六話　再認識（後書き）

感想や修正点ありましたらジャンジャンどうぞ

第七話　目覚めの良い朝

学校の一室で俺は明美さんに告白した。

「ごめんね、秋次君。私あなたの事を好きになれない」

「どっ、どうして？」

「だって、・・・・・あなたは女の子でしょ」

え？俺は体を良く見てみる。なんと俺は身長が物凄く低くなっていて男ならだれでも持ってる如意棒と宝玉がなかった。

「そ、そんな馬鹿な」

「さようなら秋次君」

明美さんが走って行ってしまう。

「まって明美さん」

俺は追いかけるが体が小さくなっている為足も物凄く遅くなってしまっているからすぐに見失ってしまった。

「そんな、どうしてこんな・・・・」

俺はブルーになりながら家に帰っていた。

「よぉ、どうした秋」

静流が現れた。

「あぁ、静流か。実はさ・・・・・明美さんにフラれちゃったよ」

「そっか、・・・・秋」

俺は返事をするがその時気がついた。あれ？こいつなんで俺の事秋って呼んでるんだ？俺がそう思っていると静流が顔をちかずけて言ってきた。

「秋、そんな奴の事は忘れて俺の彼女にならないか？」

「は？お前何言ってんだよ俺は男だぞ」

「お前こそ何言ってるんだよお前は立派な女じゃないか」

そう言って静流はさらに顔をちかずけてくる。そして俺にキスをしようとしてくる。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ーーードガッーーー

「いってぇ、頭打ったぁ。ってここは俺の部屋？」

俺はベットから落ちて頭をうっていた。それを意味する事はつまり・・・・。

「そっか夢だったんだ、そうだよ男が急に女になるなんて馬鹿げ

た話があるもんか。長い夢だったな覚めてよかった。あー、なんか気分がめっちゃいい」

俺は時計を見るとまだ6時だったが今日は特別気分がいいような気がしてもう学校へ行くことにした。俺は壁に掛けられている学ランに手を伸ばしハンガーから引っ張るように学ランをとり俺は着替えた。その時に何故か着にくかったような気がしたがたいして気にもせず別に腹も減っていなかったので朝飯は抜きにして革靴を履いて家を出る。

玄関の扉を開けると外は雨が降りそうな天気だったので俺は折り畳み傘がバックに入っているか確認してそのまま家を出る。妙にバックが重かったがそれもまた気にしなかった。革靴がブカブカだったのだが多分お父さんのと間違えたのだろうと思った。

あれ?俺なんでお父さんって思ったんだ今までオトンって言ってたのに・・・・まぁいっか。

そんな事を考えながらしばらく歩いていると前に一人の男子生徒が見えた。

「おーい、静流〜」

「お、秋か今日ははえぇな、どうした」

「いや、なんか妙に目覚めがよくってよ」

俺がそういうと静流は少し顔に笑みを浮かばせた。

「よかった、よく眠れたんだな。あんな事があったから眠れない

かと思ってたんだけど。それにしてもお前妙に顔赤くないか？」

「あんな事？昨日なんかあったっけ？」

「は？お前何いってんの昨日女になったって騒いでたのはどこのどいつだよ」

まさかだってあれは。

「っそ、そんなあれは夢だろ。清流までどうしたんだよ。俺が見た夢と同じ夢を見たのかよ、すごい偶然もあるんだな。そういえばお前身長急に伸びてないか？」

俺がそういうと静流は手を額に当ててあちゃーってポーズをとり。

「秋、これを見ろ」

静流は鏡を取り出す。コイツ鏡なんて持ち歩いていたのかよ。俺がそう思って鏡をのぞきこんでみると俺が映っているはずのとこに美少女が映っていた。

「何だこれ、新手のびっくりか？カメラはどこに仕掛けてあるんだよ」

俺がそう言ってまわりを見るしぐさをしていると静流が俺の胸に手を当てた。

「ひゃぅ」

その時俺は変な声をあげてしまった。

「なっ何すんだよ」

俺が少しあわてていると静流が。

「まだ気がついてないのか。お前が夢だと思っているのは夢じゃない、それはうつつだっ」

うつつ？うつつ・・・うつつ、うつつ・・・あぁ現か、現っていうとたしか現実って意味だったな。それはつまり・・・・。

「ないっ、ないっどこへ行ったんだ俺の○○○と○○○○は」

「おいっ、女の子がそんな卑猥なピーっとかの効果音で消えてしまいそうな言葉を叫ぶな、そこいらのサラリーマンがこっちを見てるじゃんか」

嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ。俺はしばしの間放心状態になった。その時あたりが次第に明るくなり始めた。

「おっ、晴れてきたな」

静流がそう言ったのを合図に俺が放心状態から回復して目をあけるとそこにはまばゆい世界が広がっていた。

「うっ、まぶ・・・しぃ」

「えっ、あっ」

静流はそう言ってから学ランの上を脱いで俺にかぶせた。

「なっ、何すんだよ」

「お前日光過敏症だろ。あんまり日にあたるんじゃねぇ」

そうだ、しかもお父さんは重度のって言ってた気がする。まさか命にかかわるのか？と俺が思っていると。静流が急に俺を抱き上げ。

「学校まで走るぞ」

と言ってそのまま走って行った。俺はされるままになっていた。

第七話　目覚めの良い朝（後書き）

小説を書いてるときにふと気がついた事があります。それは・・・・

チャック全開じゃったわ／／／ｗｗｗ

感想や修正点などあったらお願いします。

第八話　俺の居場所

「ゼェゼェ」

「静流大丈夫か？」

静流は明らかに疲れ切っていた。まぁそりゃ俺を担いだまま数百メートルも全力疾走してたからな。

「全く、ゼェ、問題、ゼェ、ない」

「多分誰から見てもお前は今疲れきってると思うぞ」

しかし流石陸上部。３０秒ぐらいで呼吸を整えた。

「で、どうするんだ？まずは・・・・普通に考えて職員室に行く事だよな」

俺は結構しんどそうに歩いた。これから起こる事を考えたらしんどく思わないほうがおかしい。一人の女の子が学ランを着て昨日の朝起きたら女になってましたなんて誰が信じると思う？俺だって信じられないよ。

俺は下駄箱の前まで来てある事に気がついた。俺の下駄箱は一番高い位置になり男のときでも少し手を伸ばす必要があった。それがこんなに小さくなったらどうなると思う？届くわけないじゃないか。俺が困っていると。

「やっぱりな、手が届かないんだろ。とってやるよ」

静流が来てくれた。こいつって女視点からみると結構イケてるやつじゃないか。俺が女だったら惚れてるかもな。おっと、あくまで女として生まれていたらだからな。

俺は静流がとってくれた靴を履いて職員室に向かう途中に、担任に遭遇してしまった。

「おや、君は秋次く、秋さんね。事情はお父さんから聞いているから安心しなさい」

え？お父さんが。あの人ナイスだなぁ。

「とりあえず、これが出来てるから更衣室で着替えるといいわね」

先生がそう言って一つの箱を渡してきた。何だこれ？俺はそう思いながら箱を開けてみると中に入っていたのは女子の制服だった、俺が通っている学校は男子は学ランで女子はブレザーでおまけに超がつくほどのミニスカだ。俺がそれを見ているとある事に気がついた。

「え、まさか。これを着ろなんて言いませんよねぇ？」

「何を言ってるの、これ以外に何があるっているの。はい、これ女子更衣室の鍵と制服と一緒に届いたものがあるわ」

「えっ、ちょ、俺が女子更衣室を使うのはまずいんじゃないんですか？」

「何いってるの、可愛い美少女が女子更衣室使って何がいけない

の？」

たしかに今の俺の体は女だが中身は男だぞ。って言っても無駄か。それにしても一緒に届いたやつって何だ？俺がそう思って開けてみると中にはパンティーなるものといかにも女子が着るようなヒラヒラしたシャツが入っていた。つまり、これを着ろという事か。

「そうそう、お父さんが秋さんは今日休むって言ってたけど結局来たの？」

お父さんが今日は休むって言ったのか。なんでだ？俺はそう思うがわからないのでとりあえず女子更衣室で制服に着替えることにいた。ブラとかはなかったのでホックの心配はなかったがいろいろと女子の制服を着るのには抵抗があった。それになんでこんなにミニスカなんだよ、靴下が通常のサイズで足がめっちゃ露出しているのだが気温は低いので物凄く寒かった。俺は静流が更衣室の前で待っていたので早めに出た。すると静流が俺の体中を良く見てから。

「すっげ、可愛いなお前」

「可愛いとか言うな、この服装はめっちゃつらい。羞恥心とかめっちゃスースーして寒いし」

俺は静流に可愛いと言われたときに体が物凄く熱くなった気がした。まさか俺は照れているのか？いやそんなことはない。これは、そう・・・ただ恥ずかしがっているだけだ。

俺は着替えた後に職員室に戻りそのまま朝のＨＲまで待機しＨＲクラスの皆にうち明ける事になっていた。

「それじゃぁ秋次く・・・・じゃなくって、秋さん入って」

俺は先生に呼ばれ教室に入る。事情等はあらかた先生が先ほど説明してくれたので俺は説明する手間が省けた。俺はゆっくりと教室に入ると皆の間でどよめきが起きた。どうせキモイとか言われてるんだろうな。つい先日まで男だったやつが急に女になってるんだもんな。そう思わないほうがありえな・・・・。俺がここで頭の中で言っている事を遮ったのは女子達の言葉だった。

「キャー、可愛い。こっち向いて」

とそれに続き男子が。

「秋次、じゃなかった秋ちゃん俺と飯を食おうぜー」

とか言ってるやつがいる。まさかこいつらは。

先生が俺の考えている事を呼んだように言う。

「どうやら、彼らは貴女の事を受け入れてくれるみたいですね」

俺はそれが嬉しかったが勘違いだったらいやなので一応聞いてみることにした。

「あの、皆は・・・俺の事、受け入れてくれるのか?」

俺が聞くと皆は「当たり前だろ、お前がたとえありんこになっちまっても大切な友達だよ」とか「秋次君は、女の子になって名前が

変わっても私たちのクラスメイトだよ」とか言ってくれた。

俺はうれしくって泣いてしまった。そして男子から女子まで皆が俺の周りに集まってきてこれからも宜しくなとか言ってくれた。

「皆、ありがとう」

「秋ちゃん、泣くなよ」

静流がそう言ってハンカチを渡してくれたので俺はそれで涙をぬぐった所で。

ーーーガラッーーー

扉が急に開き皆がそっちを見るとそこには一人の男がたっていた。

「お、お父さんどうしてここに」

俺はそう言った。

第九話　俺って鈍い？

そこにはお父さんがたっていた。
なぜここにと思って聞こうとするがそれは遮られた。
「全くお前は、熱が３９．５度もあるってのに良く普通に学校来れたな」
「へ？」
３９．５度って普通相当つらいはずだが・・・・・。もしかしてさっきまでの体が熱いと思っていたのはそれか。俺ってそんな鈍くなってたんだ。３９．５度と聞いてクラスがざわざわしている。
「今朝帰ってきたと思ったらお前が風呂場で倒れてたんだよ。多分のぼせたんじゃないか一応体温測ってみたら３９．５度行ってたんだよ」
お父さんがそう言ってそのあとに静流が俺のデコに手を当てた。
「えーっと・・・・・ってあっつぅ。お前良く普通でいられたな。これは相当やばいぞ」
俺も自分のデコに手を当ててみるがからだじゅうが熱くなっていたからよくわからなかった。
「あの先生、今日は早退させたいんですがその際に静流君をお借りしたいのですがよろしいでしょうか？」

「ええ、良いですがどうして静流君なのですか？」

お父さんに先生が聞くと。

「静流君は家が近いのでいろいろとこれから世話になると思うので秋の事についていろいろと話しておきたいのですよ」

「そういう事なら了承しましょう。静流君、あなたは良いですか？」

「はい、俺は大丈夫です」

そして俺と静流はお父さんが運転する車に乗って俺の家に向かう。車に向かうまではあまり無理させないためにと静流が俺をおんぶしてくれた。あいつにはそのうちたくさんお礼しないとな。俺はどうやら車に乗っているうちに眠っていたらしく気がつくと俺の部屋の俺のベットで寝ていてその時には二人の話も終っていたらしく静流は学校に戻っていた。

「俺、これからどうなるんだろうなぁ」

と呟いてみるがむなしく何も帰ってこなかったし俺はずいぶん疲れていたのでもう寝ることにした。

どれくらい眠ったのだろうか、お父さんに起こされ俺は体温を測り平熱（男だった時の）になりそれを確認してお父さんは話始める。

「お前には病気の事を重度と言っておいたはずだが覚えてるか？」

「うんまぁ」

多分日光過敏症の事だろう俺は返事をする。

「その事なのだが、お前をだましていたようで悪いんだが本当は軽度なんだ。重度と言っておいて静流君がどれくらいお前の事を思って行動してくれるか調べておきたくて彼にどう対応したのか聞いたが彼はやさしい人だな。俺は秋を彼になら任せていいと思っているぞ」

その言い方結婚するみたいな言い方なんだが、そう聞こえるのは俺だけだろうか？

「他には、まぁあまり長い話もなんだ、何かあったら彼に甘えるといい。それだけだ、あと今日愛華が帰ってくるらしいぞ」

愛華と言うのは俺のアネキで今高校3年だったはずだ。遠い学校で寮生活なのでお正月と黄金週間とお盆とあとたまに気が向いたときくらいにしか帰ってこない。たぶん俺の事を聞いて帰ってきたのだろう。俺が今相当恐れていていたのはアネキの帰還だったのかもしれない。俺のアネキと言うのが物凄くブラコンで俺が小さな時はいろいろやられても少ししか抵抗できなかったが最近ではもう簡単に逃げ切れたのだが・・・・・・多分今では何の抵抗も出来ないのだと思われる。

「ははは、そんな顔するな。愛華に女の子としての常識をいろいろ聞いてみれば良いだろう」

「うーん、正直言って怖いかもなぁ。まじで今の俺になら何されるかわからないし」

俺は出来る限り武器を準備しておこうと思った、まぁ俺のアネキは見た目は華奢なのだが異常なほど体が丈夫で俺が一番驚いたことは3階のベランダから飛び降りて普通に着地出来た事だった。本当にあれは人間か？何かの間違いで生まれてしまった魔神とかではないのだろうか？

俺がいろいろと考えていると玄関の扉が開く音がして。ツイニキヤガッタと心の中で叫び絶望を味わっていると。帰ってきたのはお母さんだった。心臓に相当悪い・・・・。

結局その日アネキは帰ってこなく俺は風呂に入ってすぐベットにもぐりこんで睡眠に入る。まだ風呂とかにはなれるのに時間がかかると思う。自分の裸を見て鼻血が出てしまったのはだれにも言えない事。

次の日の午後1時に誰かが水木家の家に入る、そしてその誰かはまっすぐに俺の部屋に入ってきて俺にゆっくりとちかずいてくる。俺は寝ているのでその人影に気がつく事が出来なかった。

第九話　俺って鈍い？（後書き）

なんだか二日間みてなかったらお気に入り件数が一気に増えていて驚きましたｗｗ
もしよろしければ、この小説は一話一話がもうすこし長い方がいいなどの要望が当たったらお願いします。

第十話　柚木と静流の話（前書き）

こんにちは先ほど一家の窓ふきとカーテンの洗濯などが終り全てセットし終わったところです。今回は秋が寝ていた時のお話、いわゆる外伝ってやつですね。
ところでアクセス解析の話別を見てみた所まえがきをすっ飛ばしてみてる人が結構いるようですね。俺は基本まえがきを見る派ですが皆さんはどうですか？

第十話　柚木と静流の話

「それで、俺に話と言うのは？」

俺は秋ちゃんのお父さんに話があるとのことで今秋ちゃんの家にいる。

「何から話したらいいものか、俺はあまり他人に説明するという事が苦手でね。とりあえず病気の事について話しておくべきか」

「日光過敏症ですか、重度・・・・なんですよね？」

俺がそう聞くと秋ちゃんのお父さんは少しいいにくそうに。

「その事なんだが実は軽度なんだよ」

「え？」

「重度と言っておけば君は心配するだろう？それで君はどれほど秋の事を思っているか調べさせてもらったんだ。まぁ、君なら大丈夫だろう」

なんか、いつの間にか試されてたらしい。

「あと、秋は今いろいろとあって精神状態は隠しているが相当不安定だ、それに今まで男として生きてきたわけだから女の事なんてわからないだろう、だから秋は今性別の面で赤ん坊みたいなものだ。そんな無防備な状態だとあんなにかわいい容姿だ、絶対にヘンなやつに絡まれたりするだろう。だから頼む身であって勝手な事だと思

うが秋を守ってくれないか？男であり今まで男であった君が男として秋に接してあげればそれでも秋が自分自身で解決するよりもらくになるはずだ。俺から言いたい事はこれだけだ、頼まれてくれるか？返事は今じゃなくていいが」

俺はもう決めていたし覚悟はあった。あれほどまでに強かった秋次は、今とても弱い秋ちゃんになっている。それはまるで極薄のなんの補正もかかっていないガラスのように脆いものだ。

「俺が手を出せる範囲。いや、絶対に秋ちゃんを守ります。彼女が一生を共にする、彼女を一生かけて守ってくれるという人が現れるまで俺が守りきって見せます」

「そうか、ありがたいな。案外君が秋を一生かけて守ってくれる人なのかもしれないな」

「なっ、何言ってんですか。俺は彼女を恋愛対象ではみていませんよ」

この人は急に何を言い出すんだろうか、別に俺は秋ちゃんを恋愛対象として見てなんかいない。たしかに秋ちゃんは可愛くて結構素直だし小さいし（？）声も綺麗だしよくよく考えてみたら俺の好みドストライクじゃないか・・・・・・って俺は何を考えているんだ。

「とととととにかく俺が出来る範囲で守りますから心配いらないです」

「そうか頼もし」

ーーーピロロロロロ、ピロロロロローーー

と秋ちゃんのお父さんの声を電話が遮る。

「っと、すまんなちょっと待ってくれ」

秋ちゃんのお父さんが受話器を取りそれを耳に当て。

「もしもし？」

『あっ、おとーさーん？私私』

「・・・・・新手の私私詐欺か、切りますよ？」

『っちょ、ひどい。この愛娘の声を忘れるの早くね？そーそー、メール見たよぉ。そうだ今帰ってるから』

秋ちゃんの姉さん相変わらず電話だと声が大きくなるな、一応俺との面識があるがもう忘れてるだろうな何しろ小2のときに会ったっきりだからな向こうはもう忘れてるかもな。

「お前はいちいち声が大きくてだだ漏れしてるし話の転換が早い」

『もうっ、それぐらい良いじゃん。それでさ、秋次の事なんだけど・・・』

「それはお前に実際に目で見てもらいたい」

『そっか、秋次としては結構つらいんだろうな。私には何が出来るのかな。ってこんなシリアスに考えても仕方がないよね。今まで通りに接してあげるそれが一番だよねやっぱり・・・・・・私ま

だ諦めてないかも』

「愛華・・・・それはつまり秋に打ち明けたいって事か、だが今は駄目だそのうち秋も今の状況を受け入れるそしてその内慣れる、その時まで駄目だ。それに打ち明けても今じゃ・・・・・・お前はそれでもいいのか？」

何を話しているのだろう途中からシリアスになっているが、気になるけどそれは俺が入り込んではいけない事なんだろう。

『そっか、今はもう秋次じゃなくて秋か。お父さん、私はあきらめないから今だって』

「そうか、じゃぁもう切るな？」

『うん、またね』

ーーーガチャーーー

「すまんな、長話で待たせてしまって」

秋ちゃんのお父さんが俺に話しかけてきたので俺は返事をする。

「いえ、大丈夫ですよ」

「それで、話の途中からのないようだが多分君にも聞こえていただろう・・・・・忘れてくれ」

「はい、そのつもりです」

「本当に、君が秋の親友でよかった。さぁ、そろそろ学校へ行かないとまずいだろう最後に一つだけ言いたい事があるそれで終わりだ」

何だろう、俺は静かに聞くことにし。秋ちゃんのお父さんが話し始める。

「・・・・・・・・・で頼めるか？」

「はい、さっき誓ったばっかりですから任せて下さい」

「本当に君には迷惑かけてばかりだな」

第十話　柚木と静流の話（後書き）

なんかちょっとシリアスになっちゃいましたね。まぁそれは良いとして。中学編に切り替わったわけですがやっぱり次話かその次あたりから中学編にしたいと思います。とりあえずその話が出るまでは今の位置にしておきます。

第十一話　アネキの帰還（前書き）

なんか今回はずいぶんと文脈とかがぐちゃぐちゃになってしまったような・・・・っと愛華の詳細書かなくては。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

水木（みずき）　愛華（あいか）

秋の姉でブラコン、今はシスコン。体は丈夫で3階から飛び降りても無傷らしくそのくせ結構な美少女で（秋には負ける）ラブレターなど日常茶飯事だが中身を見た事は一度もなく全てその場で切り捨てている。

第十一話　アネキの帰還

朝俺が起きると一人の女が俺のベットで一緒に寝ていた。普通の男だったらなんという幸せだぁぁぁとか思うんだろうけど生憎俺は普通の男じゃないというか今となっては男じゃない、それにその女と言うのは俺のアネキだったというオチで俺はアネキが起きないようにそうっとベットから出ようとしたときに俺はなにかが足に引っ掛かり転んでしまった。

「いってぇ、なんだこれ？」

俺がそれを見ると手で俺が危うく恐怖で失神しそうになったところでその手はアネキの手だった事に気がついた。

「ふふふ、逃がさないわよぉ」

アネキが転んで倒れていた俺の上に馬乗りになる。

「ちょい、アネキマジで重いからどいてくれ」

「へぇ～、今じゃもう私をどける事も出来ないのかぁ。どうしようかなぁ～襲っちゃおうかな～」

マジで危険だ誰か助けてくれ―と心の中で叫ぶとその願いがかなったのかお母さんが登場した。

「あらあら、朝っぱらからいちゃいちゃしちゃって、そうだ愛華が帰ってきた記念に写真撮っちゃいましょう」

助けてくれねぇのかよ、しかも記念って。

結局俺は苦しい為涙目の状態でとられてしまい後で見せてもらおうかと思ったが自分の無様な姿を想像してやめておいた。

「それにしても本当に美少女だね、秋」

「う、うん。あんまうれしくねぇけど」

「はぁ～、口調が男のまんまじゃん」

アネキは少し考えた後に再び口を開く。

「よっし、この際口調のこともどうにかしないとね」

「いや、『も』ってなに。一体俺に今回は何すんだよ」

「秋、朝ご飯食べたら特訓よ」

「だから何の特訓だよ」

結局アネキは俺の問いには答えてくれずに朝ご飯を食べ始めてしまったので俺も食べ始める。そういえばもう俺が女になってから3日もたっているのかと思いながら焼いたパンを食べる。

「よし、秋食べ終わったね？」

「いや、俺まだ二口しか食べてないし」

たしかに前の俺だったらもう食べ切れていただろう、今俺が食べ

ているサイズならだけど。結局俺は相当な少食で６枚切りのパンの半分でおなかがいっぱいになってしまう。ただそれでも今の俺は一口が相当小さいので全然食べれない。そういえば昨日気がついた事だが俺は肉はどうやらチキンならおいしく食べられるようだ。結局アネキは俺が食べ終わる前に自室にもどって数秒後にはもう着替えて戻ってきていた。

「よし、ちょうど食べ終わったわね秋。じゃぁ着替えてらっしゃい」

とアネキが言ったので俺は着替えてくると。

「なにそれ、そんなんじゃ可愛い容姿が台無しじゃない他に可愛い服とかないの？」

「いや、男が可愛い服とか持ってたらおかしいだろってなに人のズボン下げてんだよこの変態」

「まったく、なんでこんな男物の下着つけてるのよ。あっそうだちょっと秋来なさい」

俺はアネキに連れられ、今アネキの部屋にいる。

「何探してるの？」

と俺が聞くと。

「私が小学生の時に来ていた服、よかったぁ～とっておいて。ほらっ」

とアネキがそう言ってとりだしたのはミニスカや肩の出ている服だったり。俺が着るのには相当な気が必要そうな服がたくさん出てきたまさかそんなものを俺に着せるのではないのだろうか？といやな予感がした。そういえば誰かが良い予感は外れるが悪い予感は当たると言っていたなぁと思うと。

「さぁ着なさい」

「はぁ？」

「だから着なさいって」

「拒否権は？」

「ナニソレオイシイノ？」

うわぁ、この人知らないふりしやがった。突然アネキは俺の肩をがしっとつかんだかと思うと一瞬のうちに俺を脱がしたつまり俺はいま一糸も纏ってない姿であった。

「なっ、何すんだよいきなり」

俺がそういうと。

「ほら、早く着なさい」

とアネキは俺にミニスカを押しつけてくる。俺がいつまでも拒否っているとその内。

「ええい、もう無理やりやってやる」

と俺は結局無理やり着せられてしまったわけで。今女子用の制服を着せられた以上に恥ずかしい状況になっている。服装は白いミニスカに上はくわしい名前はよくわからん肩の出ている服で今の季節の事を考えると。

「寒い、特にスカートが。なんで女子はこんな寒い時期にこんな短いスカートで大丈夫なんだよ」

「そりゃ見かけが第一だからよ」

「俺はそんなもの気にしない」

「可愛い子はおとなしく可愛い格好してなさい」

「断る」

「秋に拒否権はない、だ～か～ら～今度はこれ」

とまたアネキは瞬時に俺を裸にして今度はメイド服を着せた。

「なんでコスプレなんだよ」

と俺が突っ込むがアネキはそれが耳に入っていない様で。

「あぁ、なんて可愛いの愛しのマイシスター」

まずい、重症だ。なぜこんな重症になってんだと思ったが。多分俺が抵抗できるようになってから俺を思い通りに出来なくなって我慢するしかなくなったんだろうな。そう思うとなんだか少しアネキ

がかわいそうに思えてきたので（ナゼ？）今ぐらいは好きにさせてやるか。結局その結論に至って。

「で、今度は何を着ればいいんだ？」

「えっ？」

「今だけだかんな、今は好きにしていいよ」

「いや、もういいよ。ほらこれ着て」

とアネキが最後に出してきたのはパーカーとやっぱりこれだけは譲れないのかミニスカだった。俺はそれを着ると。

「じゃぁ、秋買いものに行くよ」

「どこに？」

「どこにって買いものよ買いもの秋の新しい服買わなくっちゃ。あ～どんな服が似合うかな」

前言撤回やっぱり俺逃げたいです。

第十二話　3人で買い物

結局、俺はなされるままになっていた。

「さぁ、天気も素晴らしいほど曇りだし早速出かけよう」

アネキは一応病気の事を知っているのか。まぁ、知らなかったら知らなかったで困るけどな。

「そだ秋、母さんとかのことはお母さんって言ってるなら私の事はお姉ちゃんって呼んでよ」

「やだ」

「拒否早、じゃぁ秋の服は露出度の高い奴に」

「この悪魔めぇぇぇ」

「ふっふっふ、いやなら私の事はおねぇちゃんと呼びなされ」

そう言ってアネキは俺を持ち上げる。

「ちょ、おろせぇ」

「昔はこうやってやったら喜んでいたのに。お姉ちゃんの事嫌いになっちゃったの？」

そういってアネキは泣くふりをする。

「だ～、嘘泣きも駄目。いい加減おろせ～」

と俺は力の限り暴れてみるがそれは無駄なようでアネキはいつまでもおろしてくれなかったがここで救世主が現れた。

「何やってんだよ」

と後ろから声がして振り向いてみるとそこには呆れた顔をして静流がたっていた。

「あっ来てくれたんだぁ、さっすが秋の彼氏だねぇ。姉様の言う事をちゃんと聞くよぉ」

「いや、彼氏じゃないし。で、俺はなんで呼ばれたんですか？」

たしかになんで静流を呼ぶ必要があったのだろう？俺がそう思っているとアネキが静流の耳元でなにかを囁いているようだった。

「なっ、違いますよ。そんな風に思ってませんから」

「嘘だねぇ～、だって静流君嘘つくときって声が普段より微妙に低くなるんだよね。この私を欺けるとでも思っていたの？」

「良くそんな事わかんな俺なんて全くわかんねぇぞ」

と俺がそういうと静流が。

「まぁ、お前には嘘ついたことないしな」

へぇ静流って俺に嘘ついたことなかったんだ、それなら納得納得。

ところで何の話をしていたんだろうと思って俺が聞いてみると。

「べ、っべつに秋ちゃんが聞いてもなんも面白くない話だから」

「そっか、そういえばなんでちゃんづけなんだよ？普通に呼んでくれないと違和感がすごいんだが」

「いや、女の子を呼び捨てってのはどうかと思って」

「静流君は恥ずかしいのよ」

まぁ、それはわかるような気がする。俺も女の子を呼び捨てにするのは少し恥ずかしいような気もするしな。

「はっ恥ずかしくなんかない。そこまで言うのなら呼んでやろう、秋っっっ」

呼んでくれたのは良いがなんで叫ぶ、そこで歩いてサラリーマンなんてびっくりして腰抜かしてるぞ。それに呼ばれた俺の方が恥ずかしいだろ。

「さぁ、早速買いものに行くか～」

アネキはそんなことお構いなしだ。俺と静流はそのあとについていく。

近所のデパートにつくとアネキが真っ先に向かったのは洋服店売り場だった。

「ほら、秋これ試着して。あとこれと、それと、これも」

と、どんどんと服を渡されていく。俺はアネキの着せ替え人形だと勘違いされているんじゃないだろうか？

「静流、これどうおもう？」

俺はまず一着目を着て静流に聞いてみると、静流が少しフリーズした。

「変だよな、やっぱり。元男の俺がこんな可愛い服着てたら気持ち悪いよな」

「いや、良いよめっちゃいい。お前可愛いよ」

「お、秋にあうじゃん。はい今度はこれとこれとこれね」

と今度は5着位おいていく。俺がそれを試着している間、ずっとアネキの姿がなかったのだが試着が全部済んだあとにアネキがなにか棒みたいなものをもってきて帰ってきた。

「はい、秋これ」

アネキが差し出してきたものの包装紙（？）をはがすと中から出てきたものは黒い傘だった。

「何この傘？」

と俺が聞くと静流が。

「それ日傘じゃねぇの？」

「お、よくわかったね。ってまぁそこの鈍い人が気がつかないだけか」

「鈍いって俺？」

と俺が言うと二人は顔を立てに振っていた。

結局俺の服を１０着程度と下着を同じくらい買ってから俺たちは洋服売り場を出ていまちょっとゲーセンによっている。

「俺を連れてきたのはこういうわけか」

いま買った物が入ってる袋など静流が全て持っている。

「文句言うなら秋に持たせる？」

「文句じゃない、だいたい秋はこんなの持てないだろうが」

「そういえば秋の今の力ってどれくらいなの？」

そういえば今の俺の限界に挑戦したことないからわかんないなぁ。

「よし、これで測ってみよう」

とアネキが指さしたのはなんか変なやつだった。棒みたいなものをもって最初は軽いが時間が経つにつれて重くなりそれが地面についたときにどれくらいの力だったのか測るゲーム機だ。

俺がそれに挑戦してみることにした。結果。

「秒殺だね」

とアネキが言った通り数秒で俺は脱落してしまった結局それで俺の力は小学生並みらしいという事がわかった。まぁ体も小学生並みだしあまり問題ないかなと思っている。

「おれちょっとそこの自販機でジュース買ってくるよ」

と静流が言ってアネキが私も行くよと言って俺は取り残されてしまった。俺はＢＩ○ＨＡＺＡＲＤを見つけてそれをやろうとそっちの方に駆けだすと急に角から出てきた人にぶつかってしまった。

「いって～。あ、すいません」

俺はぶつかった衝撃で転んだまま謝った。

「いやいいよ、それより君可愛いね。お兄ちゃんがおごってあげるから一緒に遊ばない？」

と誘ってきた。ナンパってやつか？俺はあわてて逃げだそうとするが肩をがっちりとつかまれてしまい逃げ出せなかった。俺は声をあげて助けを求めようとしたが怖くて声が出なかった。やっぱり俺女になってから怖がりになってるなと頭の超片隅で思い。そうとうまずいと思った時。

「ぐはっ」

そいつが急に横に吹っ飛んでいき俺は解放された。俺は少しそこで固まっていたがすぐに誰かが助けてくれたのだと思いその人を見

るとその人はあいつの顔を蹴った姿勢のままでいた。茶髪でリングをつけていていかにも不良って感じだった。

蹴られたやつが起き上がり蹴った人の胸倉を掴む。

「てめぇ何すんだよ」

そう言うと。

「嫌がる女の子を無理やり連れて行こうとするなんて下等生物がする事だ。その手を離せ下等生物」

と蹴った人が蹴られたやつの腕をつかんだかと思うとそいつを地面にたたきつけた。

「ってぇ、畜生。おぼえてやがれ」

そう言って走って逃げていく。ずいぶんと古いアレだなと思っていると。

「大丈夫だったか？もう怖くないよ」

と蹴った人が言った。

「あ、ありがとうございます」

「気にすることなんかない。君みたいな可憐なか弱い女の子を守るのが男の役目だからな。俺は、っと名乗るのはもしまた会えたらにしよう。じゃぁな」

といってその人はどこかに行ってしまった。

「あいつ誰？」

と静流とアネキが戻ってきた。

「さぁ、でも悪い奴じゃないと思う。助けてくれたし」

「助けてくれたってなにかあったの？っとそろそろお昼時か。詳しい話はそこのファミレスでお昼でも食べながらにしようか」

とアネキが指を差したファミレスに俺たちは向かう。

第十二話　3人で買い物（後書き）

今回は少し長くなりましたね。
感想＆要望等どしどしお願いします。

第十三話　俺が気がつかない変化（前書き）

もうすぐ寝ようと思ってるんで今回はあとがきとか短縮しますｗｗｗ

第十三話　俺が気がつかない変化

「ふぅ～ん、つまりナンパされたって事か～」

「う、うん」

俺はあの後にさっき起きた事を話した。なんだかアネキは面白そうにその話を聞いていた。静流はなんか心配していて「変な事されなかったか？」とか聞いてくる。

「静流、大丈夫だったって何度も言ってんだろ。お前は俺の母親かよ」

と一度言うとそれ以上しつこく言ってこなくなったが今度はアネキが「初ナンパされる気分はどうだった？」とか聞いてくる。マジでその話はもうやめてくれ。と俺が思っているとウェイターの人がなにかを持ってくる。

「ギガ盛りチョコレートパフェになります」

と今の俺の顔よりも大きいパフェを持ってきた。アネキはそれを嬉しそうに受け取りそれを一口食べる。

「うまぁ～」

と言っている。俺は本来甘いものは嫌いだがあんなにうまそうに食べてるアネキを見ると味見程度に食べてみたいなと思ってしまう。前はいやだった甘い匂いも今ではすごい良い匂いに思える。そうだ今の俺は前の俺と味覚が違うんだ。もしかしたら食べられるかもし

れない。結局俺は耐えきれなくなって。

「アネキ、一口貰っていい？」

と俺が聞くと、アネキは嬉しそうに。

「うーん、どうしよっかなぁ・・・・っとそうだっ今が秋と間接キスする絶好のタイミングか？よし、秋おねぇちゃんが使ったこのスプーンでたべなさ」

とアネキが言い終わる寸前にウェイターが来て。

「申し訳ありません、こちらのパフェは大人数用でしたのにスプーンが一つだけで・・・・。もうなんと謝ればよいか、今頃ですがスプーンをお届けにまいりました」

謝るのは良いんだが言葉がぐちゃぐちゃになってるぞ。お届けって何ぞ、普通お持ちしましたじゃないのか？それにどうやらアネキの怒りを買ってしまったようだな。まぁ流石にアネキでも他人を襲うような事をしないが怒りのまなざしで睨んでいる。ウェイターは幸運の事かそれに気が付いていない。

「一口頂きまぁ～っすっと」

俺は結局ウェイターが持ってきたスプーンを使ってパフェを一口食べると。甘い味と匂いが口の中で広がって、アイスの部分がひんやりと冷たくっておいしかった。どうやら俺は甘いものが好きになっていたようだ。

「秋顔が幸せそうだねぇ～、もっと食べる？」

「えっ、良いの？」

「おっけおっけ、静流君も食べる？秋がが使ったスプーンで」

と姉が冗談を言うと、さっきまで寝ていたのかと思われる静流ががばっと体を起こすと。

「俺もく・・・・やっぱいい」

そうか、静流もあまり甘いものが好きじゃないんだろうか？俺がそう思って一緒にアネキとパフェを食べ続ける。俺の顔よりも大きかったパフェはあとかたもなくなった。そして俺の腹は悲鳴をあげている。この事も考慮すべきだった、甘い物の食べ過ぎでむねやけになりおまけに冷たい物の食べ過ぎでおなかを壊してしまった。俺は結局そのあと腹が痛すぎたのでそこで解散となり帰りは姉におぶってもらった。

家に着き、いまだに俺は気分が最悪だったのでもう風呂に入って寝てしまう事にした。俺は風呂場の手前の更衣所で服を脱ぎ。

「なんだかんだいってもう慣れちゃったな」

と呟く、実際まだ1週間も経過していないが人間は簡単に慣れる動物だという事を実感した。でもさすがにこれは早く慣れ過ぎてないか？と思った。実際これは慣れるのが早すぎで他にも俺が変化している事があったが今の俺には知る由がなかった。

俺が風呂に浸かっていると誰かが更衣所に来て脱ぎ始める。

「なっ、アネキ？俺今入ってるぞ」

「別にいーじゃない、久しぶりに一緒に入ろうよ」

とアネキは脱ぎながら言う。

「いや、久しぶりにとかじゃなくってそれはまずいだろ」

「まずくなんてないよ。だって、私たち姉妹じゃん」

う、そうだった。今の俺は女であるからして何も問題はないのだが、でも問題はあるのだ。そう思ってるうちに扉がガラッと開いてアネキが入ってくる。俺は運悪く入ってきたアネキの体全体を見てしまった。俺は恥ずかしくなり顔を湯に沈める。

「最後に一緒に入ったのいつだっけ？」

とアネキが聞いてきた。たしかあれは7年くらい前の話だった気がする。

「多分、俺が小2の時だと思う」

「そっか、もうそんなに立つのか・・・・」

しばらく沈黙が続きアネキが浴びてるシャワーの音が響きわたる。その沈黙を破ったのは意外にも俺だった。

「ねぇ、髪の洗い方教えてくれない？」

「お、任せて。お母さんは教えてくれなかったのか」

「うん、流石に、ね」

「じゃぁ、こっちに来てよ」

とアネキは手招きするので俺は湯船から出てそっちの方に行く。

「秋は体も髪も綺麗だね」

「ありがとう」

「ふふっ、本当に綺麗だよ。あの傷も・・・・なくなっちゃったんだね」

とアネキが悲しげに言う。俺はそれを聞いて腹部を見てみるが本当に傷がなかった。その傷というのは俺が小さいときに何かで怪我をしてしまったらしい。どうやらその原因がアネキにあるらしく今も気にしているらしい。ちなみに俺はその時の事はもう覚えていなくどうやって怪我をしたのか覚えていなかったし誰も教えてくれなかった。

「それにしても、ムダ毛の一本も生えてないね、それにホクロすらない。きれいすぎてちょっと不気味かも」

たしかにそれは少し不気味かもな、でも綺麗なのは良い事なのだろうと思い俺はこれでもいいと思った。

そして俺はアネキに髪と体の洗い方を教えてもらい。風呂から出る前にアネキに抱きつかれたときにそれから少しの間パニクってしまったが布団に入ったら安定した。

第十四話　ゲームの好みも変わっていた・・・（前書き）

今日はギリギリその日のうちに投稿できましたね。そう言えばＦａｔｅ　ｚｅｒｏを今見ているけどまだ面白さがよくわからない様な気がするっと神様のメモ帳ＤＬおわた。よし明日は友達に進められていたはがないＤＬしよう。

第十四話　ゲームの好みも変わっていた・・・

今俺とお父さんとアネキの3人で駅のホームにいる。

「やれやれ、もう行ってしまうのか」

「うん、今回は秋の様子を見に来ただけだったから。お父さんは体に気をつけてね、あとはお母さんに宜しく頼んだよぉ。最後に秋」

「なんだ？」

俺はアネキに呼ばれて返事をして少しアネキに近づく。

「秋は父さんや母さんのことをお父さんとお母さんって呼んでるんだって？それなのに私だけアネキじゃやだから今度会ったら一番最初にお姉ちゃんって言ってね。それともう少し言葉をと行動を女の子っぽくしなさい」

「女の子っぽいとかわかんないけど」

「自分がどんな女の子が可愛いと思うか、その思った事を目指せばいいんだよ。お正月にまた会えるけどそれまではバイバイだね。じぁね、秋」

俺は最後にアネキに抱きつかれた。アネキに（普通の状態で）抱きつかれるのは慣れているから俺も抱き返した。

「じゃぁね」

と俺が言うとアネキは名残惜しそうに腕を離し、手を振って電車に駆け込みアネキが入ってくるのを待っていたように扉が閉じる。俺も手を振り返し電車が見えなくなるまで見つめていた。

「さ、秋。晴れないうちに帰ろうか」

「うん」

今日も運よく曇りだった為日傘は必要なかった。しかし午後から晴れるというので俺たちは急いで帰ることにした。お母さんは今日も仕事だった為アネキの見送りは出来なかった。今頃だけど本当にお父さんは何やってるんだろうと思う。

俺たちが家に帰る途中に静流に会った。静流はどうやら午後暇だったらしく俺は家に連れ込んだ。俺は静流を自分の部屋に入れるべきか躊躇ったがいずれは入られてしまうだろうと思い入れることにした。なぜ俺が出来れば入れたくなかったのかというと、実は俺の部屋は姉の手によりたった一夜で男の部屋の面影なんて何もない完璧に女の子の部屋と化してしまった。

「静流、一応心構えをしておけ。男が入るのには相当つらい事になっているからな」

「あぁ、わかった・・・・いくぞっ」

静流が俺の部屋の扉を開け俺の部屋の全容が視界に入ったところで止まる。

「・・・・・・・部屋間違えました～」

と静流は何事もなかったようにそう言って俺の部屋から出て行こうとする。それを俺は慌てて止める。

「間違えてないから、言っただろお姉ちゃんにあんなんにされたって」

「いや、でもあれは男としては抵抗があるぞ。ん、お前お姉ちゃんなんて言ってたっけ？」

その事か、俺は答えようとすると。

「ま、正直どーでもいいんだけどさ。マジでこの部屋入らないとだめ？」

「うん、だめ」

俺がそう言うと静流は諦めたのようか俺の部屋に入り床に腰掛ける。

「で、何やる？生憎Ｗ○ｉはないからＰ○３な」

俺はそういいながら２人プレイが出来るソフトをどんどん出していく。静流はＢＩ○ＨＡＺＡＲＤを選び二人でそれをやることにした・・・・・が。

「秋、怖いなら別のでもいいぞ？」

と静流が言ってきた。

「べっ、べつにこわｇっがってんなんかぁねぇよよよ」

と俺は言い返す。

「そんなに手が震えて汗タラタラ流していちいち敵が出てきたらびくっている状態でそんなこと言われてもな」

実際俺は今静流が言ったような状況だった。前は「ふはははは、このザコ共がぁ～」とか言いながらショットガン撃ちまくってたのに、どうやら女になってそれも駄目になってしまったようだ。俺がぎりぎりな思考の中そう考えていると急に出てきた虫型の敵に驚いてしまい。

「キャッ！？」

と私は静流に抱きついてしまった。

「うわっ、いきなりどうした秋」

「ご、ごめんなさい私怖くって」

と私は慌てて静流から離れる。

「秋、言葉が・・・・」

「えっ？どうした俺なんか変だったか？」

「いや、やっぱ気のせいだ」

どうしたんだろう、静流がずいぶん焦ってるような気がする。俺が静流の顔を見ると少し顔が赤くなってるような気がした。この部

屋暑いか？もしかしたら暖房が利きすぎてるのかもしれないと思って俺は設定温度を下げることにした。

「ちょっと設定温度下げるな？」

「え、なんで？」

「なんでって、お前熱くないのか？顔赤くなってるぞ？」

と俺は言う。もしかしてこいつ熱でもあるのかと思ったが多分違うだろうなと思ったけど一応確認しておくか。

「お前もしかして熱でもあんのかちょっと見せてみろよ」

と俺はそう言って静流のおでこに俺のおでこを当てる。なぜそうするのかというと手で触ってみるよりもわかりやすいからだ、俺がおでこを当てると静流はめちゃくちゃ熱くなっている事がわかった。

「お前めっちゃ熱いぞ、大丈夫か？すぐに帰ったほうがいいだろ」

「そうだな、じゃぁ俺もう帰る」

ととぼとぼ歩いて行く静流を俺は見送り自室に戻りなんか妙に疲れたような気がしたので俺はそのまま眠ることにした。

第十四話　ゲームの好みも変わっていた・・・（後書き）

感想や要望ｅｔｃ．．．いろいろとお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2088z/

秋の夕暮れ

2011年12月21日23時49分発行